

例えばそんなヒロイン
がいたりいなかったり

chee

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

硬梨菜先生の唐突な爆弾ゲロから生まれた楽羽ちゃんがぶっ刺さったので衝動書きです。想像の部分が強いので解釈違い注意。

目次

例えばそんなヒロインがいたりいなかったり	1
例えばそんなお誕生日会があつたりなかったり	9
例えばそんなデートをしたりしなかつたり	21
例えばそんな喧嘩もしたりしなかつたり	34
例えばそんな星空を見たり見なかつたり	48
例えばそんな聖夜を過ごしたり過ごさなかつたり	58

例えばそんなヒロインがいたりいなかったり

私の名前は陽務楽羽。17歳。現役JKである。

学校ではゲームに魂を売った女なんて言われてるが、一応彼氏がいる。

もう一度言う。彼氏がいる。

ドヤア

!!!!!!

……うん。段々虚しくなってくるわ。別に彼氏が居ようと居まいと変わらんし。学校じゃ彼氏持ちっただけで持ち上げられたりもするけど、別にそんなステータスには全く魅力を感じないっつもの。なんで世の女子はみんな彼氏を欲しがるんだろ。

まあ、今日学校帰りにまっすぐ家に帰らないのも久しぶりに現実側リアルでその彼氏に会うからなんだけど、別に少女漫画のヒロインみたいに胸が高鳴ったり期待で頭真っ白にしたりはしない。

そんなんで付き合ってる意味あんのだって？いろいろあったんだよほっとけ。

「お、久しぶり、楽羽」

「うん。久しぶり、慧」

学校近くの駅前広場の時計の下。そこにその男はいた。

魚臣慧。

日本人最強と謳われるプロ格ゲーマー。このひよろつとした頼りなさそーな顔面総受け魚類が私の彼氏だ。

「学校終わり？お疲れ様」

「ありがと。慧もお疲れ様。仕事だったんでしょ？」

「まあ、俺の仕事ってゲームするだけだけどね」

「確かに。素直に労った私に謝れ」

「やだ」

「はあ。やだやだ、これだからプロゲーマーって人種は。」

「とりあえず、どっか店入ろっか」

「うん」

こんな私達だけど、慧に手を引かれて歩く様はやっぱり傍から見ればカップルなわけ
で。いや、実情もカップルなんだけどさ。

全く、どうしてこうなったんだか。

とりあえずで入ったのはみんな大好きラーメン屋。え？カップルで来るような店
じゃないって？いいんだよ私達はこれで。そもそもそんなオサレな店でイチヤイチャ
するような間柄でもあるまいし。

「……いつも言うけど、もつといいお店でもいいんだよ？俺奢るし」

「だからそれじゃ私の気がすまないっていつも言ってるでしょ？いいんだよ割り勘で。
ラーメン美味しい」

「確かにラーメンは美味しいけど、これでも普通に国内トップクラスに稼いでるからね
？」

「そこに甘え始めたら終わりなの。ほら、とりあえず食べよ」

「……わかった」

私が注文したのは濃厚味噌ラーメン。慧が注文したのはあっさり烏白湯麺。どっちも冬場に食べるラーメンとして間違いないチョイスだ。

まずは景気づけ。勢いよく麺を啜り込む。

「はあ……うつま」

「楽羽つてほんと美味しそうにラーメン食べるよね」

「美味しいんだもん。当たり前じゃん」

美味しいもんを美味しく食う。それ則ち至高。

「そういう慧はチマチマと……」

慧はさつきからわざわざレンゲに麺を丸めて口元を隠しながら……つて女子かよ。ていうか、は??何普通に女子っぽい仕草して可愛いのコイツ。何でお前は私の彼氏のかせに私より可愛いんだよ潰すぞ。

「……楽羽、目が怖い」

「スイマセン。慧ちゃんが可愛すぎて殺意が湧いただけですわ。女子として完敗なのですわクソツタレ」

「何その口調……」

「慧さあ、彼氏が自分より可愛い彼女の気持ちって考えた事ある?」

「あるわけがないだろ!!……………はあ」

ため息をつきたいのはこつちなんだけど!?もうラーメン思い切り啜る気も起きないんだよこつちは!!

「あのさあ……………」

唐突に慧が箸を置く。

そのまま席を立って、

一歩近づいて、

……………つて待って待ってなにしてんの!?!?

あたま ぼん ぼん

……………ぎゅっ

「……………ツツツ
!?!?!?!?!?!?」

「変なのはお前だあ!!!」

マジで何やってんだよ!拷問か?拷問なのか!?そんなでもってお前はなんで顔色一つ変えないんだよ精神力異常か!?!?

「あ、あのー、お客さん?もうちよつと静かに……」

「……あ」

やってしまったあ……!!!

これ全部慧のせいだからな!!慧が突然あんなことしてかつこ…かつk…変なこと言
いだすから!!

「……慧」

「ん?」

「帰ったら便秘来いや。ぼっこぼこにしてやる」

「ええ……」

くつそ調子の乗んなよ総受け魚類が。あんなこととして惚れ直すと思つたら大間違いだかんな。とりあえず、今日のこととは許さん。

いや、別に急にぎゅってされて嬉しかったとかないから。絶対にないから。

だから、こんなにも顔が熱いのはラーメンのせいだ。決して、慧にドキドキしてるとかじゃないからな!!!

例えばそんなお誕生日会があつたりなかつたり

「それじゃあ、せーのっ!」

「永遠様!! (永遠さん) (天音さん)、誕生日おめでとうございます!!!」

ぱあん!!とクラッカーが鳴り響き、陽務家のリビングに拍手が響く。

「みんなありがと!」

今日は瑠美主催の天音永遠様生誕パーティー。瑠美が仰々しい言い方してるだけであだのペンシルゴンの誕生日パーティーだな。参加者は私、慧、瑠美、永遠さん。ペンシルゴンちなみに瑠美の前では「ペンシルゴン」は禁句。邪教徒に現実を見せたくないから?……いや、瑠美を大魔王の手先にしないためにだな。あいつ、永遠さん鉛筆戦士としての一面の本性を知ったとたんにどんな非人道的な役目でも自分から買って出るに違いない。

「本当にありがとう瑠美ちゃん!!こんな美少女たちに祝われて私は幸せ者だよ!!」

「そんな!永遠様にそんな風に言っていただけなんて光栄です!!」

「俺は美少女じゃないけどね」

「とかいって普通に私よりかわいいよな潰すぞ」

「怖い、楽羽、目、怖い」

私や慧も付き合っただけで、本命はやっぱり瑠美だ。いくら極悪非道鉛筆戦士であつても、あんなにも純粋な尊敬のの眼差しを向けられて嬉しくないなんて事はないだろうからな。

「はい永遠様！これプレゼントです!!」

瑠美が取り出したのは特注ネックレス。まあ、瑠美がプレゼントするならファッショングッズだろうとは思ってたけどまあ、永遠さんが既存のアクセをチエックしてないなんてことはないだろうからな、それにしてもオーダーメイドは手が……というよりも金が入りすぎてると思うが。

「ありがとう瑠美ちゃん!!!」

「じゃ、これ僕たちからも」

「ほらよ」

「うんうん。ありがとうね」

私からはマグカップ、慧からはうさぎのぬいぐるみ。こいつチョイスまでかわいいかよ………ってこれヴォーパルバニーか？

「慧、これどこで買った？」

「ゲーセンで取った。なんかシリーズ化されてたよ」

「蠍あった？ 水晶群蠍」
クリスタルスコービオン

「あったような…気もする」

「……うっし」

蠍はいい。しかもこのぬいぐるみシリーズの水晶群蠍、私の記憶が正しければ、めつつつちや可愛かった。絶対取る。

「じゃあ、みんなにはこれ、お返し！」

永遠さんが何やら大きな袋を取り出す。3つも。っていうか誕生日プレゼントって
お返し用意するもんじゃなくね？

……すっげー嫌な予感がする。

「はい瑠美ちゃんこれね」

「ありがとうございます！開けていいですか？」

「もちろんだよ！」

瑠美が袋を開けると中から出てきたのは……

「洋服…ですか？」

「そう!!この素材だけは一級品の三人のためにこの天音永遠様が直々に最高に似合うか

わいい服を選んだのだよ!!」

うっげえ!!面倒くさいことしてくれやがったコイツ!服なんてジャージと制服があればなんとかなるのに!!

「ちゃんと着てね?」

「き……気が向いたらな」

「は?そんな私が許すと思ってるの?バカ姉貴」

ほら面倒くさいやつこの面倒くさいスイッチが入ったあ!!ていうか永遠さんのその外道顔、絶対こうなるの狙ってただろ!

「いや、待て、待ってくれ……」

サア……と慧の顔が青ざめる。それを見て永遠さんの頬が一気に釣り上がる。……そっか、永遠さんは三人にかわいい服を選んだって言ってたな。なるほど。

「ぜつつつたいに着ないからな」

「まあ、カツツオ君は着る機会もないだろうからね。直近で女装企画でもなければ」

「んなつ……!!!」

「お姉さん聞いちゃったからなー。今週末に女装企画断りきれなかつたつて。大丈夫!!この服持つてけばカツツオ君の素材を最大限に活かして超絶美少女になれるよ!!!」

「なんて事を……!!!」

いや本当になんて事をしてくれたんだこの鉛筆戦士は。形容詞的な意味 それ最終的に私が傷つくやつだろーが。

「楽羽ちゃんはこれね!」

「はいはい」

とりあえず中身を確認………つてワンプカ。やなんだよなー、絶妙に動きづらいし。やっぱジャージには及ばん。

「とりあえず、楽羽ちゃん一旦それ着よつか」

「はい?」

「溜美ちゃん、取り押さえて」

「はい!!!」

………はつ!溜美、いつの間に後ろを取って!

「放せえ!」

「じゃあカツツオ君、ちよつと楽羽ちゃん借りてくね〜」

「う、うん」

いやうんじゃないだろ助けろよお前それでも私の彼氏かあ!?

………つてコイツ今日反らしやがったぞぜつてー許さねえからなああ!!

そうして連れて行かれたのは2階にある瑠美の部屋。

瑠美に押さえつけられた私を横目に永遠さんが部屋の鍵を閉める。

「ほら、さっさと着ちやお？」

「やだよこつ恥ずかしい！」

「瑠美ちゃん、脱がして」

「はい!!」

「やめろお!!!」

必死の抵抗もあえなく、瑠美が私の服を脱がせていく。くつそ、お誕生日会終わったらすぐに楽になれるように脱ぎやすい服を着てたのが裏目に出た！

「はーいじゃあこれを着ようねえ〜」

「くつそお……」

最後の抵抗と言わんばかりに睨みつけても余裕綽々の表情は崩れない。

「あのね楽羽ちゃん、私達は楽羽ちゃんのためを思ってたね…」

「そうだぞバカ姉貴今すぐ感謝してひれ伏せ。永遠様に」

「私のためなら今すぐやめれ」

「やだ」

「やっぱ楽しんでるんだろ!!」

「まあね!!」

迫りくるなんかよくわからんけどオシヤレそうで高そうな服、下手に暴れて破きでもしたらと思うと、下手に抵抗もできない。為すすべもなく私は着飾られていった。

「じゃあ次はメイクね。瑠美ちゃん、メイク道具ってある?」

「()に!!」

「や…ちよっ!やめっ!!」

「はーい、動かないでー」

「やめっ…やめろおー!!」

やっ……

ちよっ……

くすぐったいってばあ……

もお……

……

「んだよ、なんか言えよ……」

「いや、その……」

結局永遠さんと瑠美のいいようにされた私を見て慧は黙り込む。傍から見れば今の私は、さながら彼氏慧のために気合を入れまくった恋する乙女だ。せめて何か言ってくれないと私が恥ずか死ぬ!!!

「ああもう恥ずかしい!よかつたなあ!私をからかうネタができて!着替えてくる!!メイクも落とす!!」

「ああちよつと待って!!楽羽!!」

「何さ!?!」

ガツといきなり腕を掴まれる。何なの!?!早く着替えたいのに!!

「その…さ、いいんじゃないの?か…かわいいし」

「あ………はあ?!?!」

ちよつと待ていきなり何言つてんの気持ち悪い！本っ当にきもちわるいい！！

「うるさい！！着替える！！」

「あつちよつ…」

うるさい！調子乗んなバカツツオ！！こないだからお前はそういうこと言つとけばいいとか思つてんじやないだろうなくそつたれえ！！

ホント、ほんとにバカ。バカツツオ。マジで許さん。

結局すぐに着替えた。当たり前前だろ。だからそんなちよつと残念そうな顔するん

じゃねーよ馬鹿。

ほら、せつかくの高そうな服がメシで汚れたら困るだろ?……とは言つたけど普通に恥ずかしいんだよ察せ。

その後は普通に飯食つて、瑠美の買ってきたケーキをみんなで食つて、私の部屋にあつた非VRのレトロゲーをみんなで少しやった。こいつらと騒ぐ時間は意外と楽しかつたのか、思ったよりも早く時間が過ぎたな。もう夜で、流石にそろそろ帰らないとやばいだろ。主に現役JKと現役JCの家に入り込んでる唯一の男である慧が。

「それじゃ、私達はそろそろお暇するよ」

「楽羽、瑠美ちゃん、お邪魔しました」

「今日は本当にありがとうだね!!」

「こちらこそありがとうございました!!」

「ん。じゃね」

帰り支度を始める永遠さんと慧。そういえば永遠さんは結局瑠美の前で本性を出し切らずにある程度隠し通したな。流石と言わざるを得ない。

「ていうかさ、慧」

「ん？」

いやこれ本当に言うのか？いや、結構恥ずかしいぞ。でも、このままでもなんかなあ……

「今日、永遠さんにプレゼント買ってきたじゃん」

「うん」

「私、その……まだ慧のプレゼント……貰ったこと、ないんだけど……」

「……………」

ああもうやつぱは恥ずかしい！なんか私がねだってるみたいじゃん言わなきゃよかった!!

「……………つぶ」

「んなあ!？」

笑ったな！今こいつ笑ったな!?!?

「はは……そだね。たしかにそうだ」

「だろ!？」

「じゃ、今度一緒に取りに行こうよ。蠍のぬいぐるみ。それでどう?」
「ん。それでいい」

「いいじゃん。それ。蠍のぬいぐるみ、今度二人で取りに行く。予定開けなきやなあ。
「じゃあ、日程はまた今度決めよ」

「うん」

「じゃ、とりあえず俺はそろそろ帰るよ」

「またね」

「うん。また」

結局、また予定が一個増えてしまったな。

慧と二人でまた出かけるのか。

さつき『かわいい』って言ってくれた服、着ていこうかな。

例えばそんなデートをしたりしなかったり

うーん。来てしまったなあ。慧デーと約束した日トが。

いや、デートっていうかき、単に遊びに行くってだけなんだけどさ。私と慧恋人同士の関係を考えたらまあデートになっちゃうかなって。

別に意識してるわけじゃないぞ。私と慧なんて付き合っただけだよ。私と慧の関係を意識してると、慧からすると彼女との華やかなデートになるはずなわけで、まあ多少オシャレしてやるのもやぶさかじゃないかなあ……って。アイツの金券のためにもさ。

それでこの間ペンシルゴンにもらった服を引っ張り出してきて、瑠美にもちよつとメイク手伝ってもらってここに至るわけなんだが……

「やっぱちよつと気合入れ過ぎ感出てるかな……」

通りを歩く私の姿が店の窓ガラスに映る。そこに映っているのは完全に浮かれ

切ったまるで自分じゃないような少女。「これが……私？（キラキラ）」みたいな定番ネタをする気も起きないほどに普段の私とかけ離れててちよつと気持ち悪い。

ていうか、ええ……

これで慧に会いに行くってことですよ？なんかヤダ。つていうか何で私がわざわざオシヤレしてるんだっけ？だんだん腹立ってきたぞ？

……いや、落ち着け私。思考が割とめちやくちやだぞ。

「ふうーっ……ふうーっ……ふへへ……」

そうだよなあ、慧かわいいって言ってたしなあ。

「んー……まいつか」

結局私より気合の入ってた瑠美のせいだから。別に私が気合入りまくってるとかそんなんじゃないから。私に気がする必要はない！……はず!!

「おはよ、慧」

「おはよう、らく……は……」

待ち合わせ場所はいつぞやのラーメンの時と同じ駅前広場。集合時間3分前について見れば、慧がマヌケ面を晒していた。

口をポカーンと開けてただ食い入るように私を見る……そんな見るなよ恥ずかしい。

「口パクパクさせてどうした？つ……遂に鰓呼吸でも始めたんですかあ？」

「いや、だって、楽羽が……」

「……私が何だよ」

うう……慧の視線が刺さって思わず身をよじる。そんなに私の恰好がおかしいのか。ていうか、この空気居心地悪すぎるんだが……

「身の危険を感じるから帰る」

「ああ待つて待つて!!!」

「んああ?」

「その、すごいかわいかったから……さ?」

「んなツ……!!!」

だから!!そういうこと言うのやめろって何度も!何度もお!!

「……うるさい。バカツツオ」

「ふふ…悪かったって」

「何で笑ってるんだよ!!」

「その、楽羽の反応が…:…ね?」

「ね?じゃない!!」

もぉー開幕からこれだよ。こいつの空気に飲み込まれたらダメだ。絶対に持たない。

私の精神が。何とかしてイニシアチブを……

「慧!!!」

「なに?」

「……はやくいこ」

「うん」

やっぱ今日のコイツは調子狂う
!!!!!!

ふつつつぶ。出会い頭で散々恥をかかされたが、それもここまでだ。思い出してみたい欲しい。今日の目的地ってどこだっけ??:……………そう!ゲーセン!!ゲームに青春を全課金した女こと私の安住の地!!ここなら、私が、私のペースで主導権を握れる!!!

……誰がゲームで青春腐らせた女じゃない。

「クレーンゲームって下の階だっけ?」

「そ」

ゲーセンに到着した私達。とりあえず目的のぬいぐるみを求めて地下会に潜る。ここでさっすきの雪辱をオ……

「さ!!!そ!!!り!!!」

やっつぱい。かっつわいい。えっ、なにこれ殺しに来てるの??っていうかクオリティ完璧じゃん!シャンフロ内の水晶群クリスタルスコービオンのフォルムをベースにしてちびキャラ化、それでいて全身の色合いが完全に水晶の光沢を再現してて雰囲気の完全な再現に成功して

るのにあくまで角ばった体を丸く柔らかかそうなぬいぐるみで表現してて絶対抱き心地やばいってこれ!! 最高かな? 最高だよな? 最高だぞ!!!

「あああ今すぐとつてやるからなマイブラザー!!!」

「いったん落ち着こ」

「無理!!!」

1 プレイ2000円? とりあえず5000円入れとけば3回出来てちよつとお得つてクレーンゲームの鉄板だから! 普通1、2プレイで取れるようにはできてないし、もし取れちゃうようなガバ難易度なら複数体狙いで行くのでオールオツケー!!

「いぢ!!!」

ちやりん。きゅいんきゅいんきゅいん。ぴろりぴろりぱらりら。

コインを入れると機体が光りだして、準備ができたと合図を告げる。そして私はアームを動かすレバーに指をかけた。

「…「真界観測眼」!
クオンタムゲイズ

「いや、使えないから」

「雰囲気の水を差すなアホ」

「ええ…」

私の眼が捉えた完璧なタイミングでアームが獲物へと襲い掛かる。アームはぬいぐる

るみの後ろ脚を捉え、ぬいぐるみはころりと転がった。

「お、大分近づいたね」

「うん。だけど次どこ狙うかな…」

「しつぽに引つ掛けてまたずらす？」

「かなあ…」

とりあえずもう一回。今度もアームは狙った位置に動き、しつぽを捉える。しかし、今度はその場でくるつとまわてしまい、ほぼ移動しなかった。

「ああ…残念」

「いや、この体勢ならあの胴体の後ろの方を狙って…」

そしてもう一回、今度も狙い通りの完璧なアーム捌きで…

「おー！」

「いよつしやああああ!!」

高くから落とされた蠍のぬいぐるみがかごころと転がって穴へと落ちる。そして取り出し口から顔を出した。そのまま取り出して「ぽふっ」と抱えると、ちよつと腕が埋もれた。さらに今度は顔をうずめてみる。

「……………」

「楽羽？」

「はああああ気持ちいいいいかわいいよおおお！」

えへへえ…やばいよこのぬいぐるみ一生抱いてられる。つていうか間近で見ると余計にかわいい。あの水晶の体をふさふさの毛で表現するのは反則じゃない!? あああかわいいなにこれえ!!

「えへへ…ふわああ…」

「よかったね」

「うん!!」

また慧が気やすく頭を撫でてきた。いつもなら恥ずかしくて怒ってるところだけど、今は機嫌がいいので許したげる。

はあー最高。

「せっかくだし俺もやろうかな」

「おう。がんばれ」

慧がクレーンゲームに500円玉を投入。私が取ったのとは別の蠍のぬいぐるみに狙いをつけて……

…スカッ。

「…えっ」

「…もつかい」

…スカッ。

「ぐぬぬ…」

あれれ？ひよつとして天下のプロゲーマー魚臣慧様がクレーンゲーム苦手でいらっしやる!?なんとお可愛いこと!!

「待って、楽羽、大丈夫だから」

「ぷぷ。その調子で何が大丈夫なんだか」

「ほんと、次は取れるから」

「ほーん。じゃあやってみ？」

…スカッ。

「……」

「ぶっ」

「しょうがないだろ！こういう操作にワンクッション入れるゲームは苦手なんだ!!」

そういうえば、同じ理由でロボゲーとかも苦手って言ってたっけ。

「大丈夫。ちゃんと取れるから」

追加で500円玉を投入する慧。あ、取れないクレイニングゲームに金突っ込むのはほんとに沼…

「いける…いける…」

まあここまで熱量持った慧を止める気も起きないからとりあえず見てることにしよう。……あ、初めて引つかかった。慧がひっつけた蠍がごろごろと転がって穴に近づく。

「ほら!!できた!!」

「うん。取ってから言え」

「任せろ」

何故か3スカの後一回うまくいっただけで自信をつけた慧がさらにぬいぐるみに狙いを定めてレバーに手をかける。

…スカッ。

「ぐぬぬぬ…」

それにしても大の男が本気でぬいぐるみのクレーンゲームに張り付く絵面って酷いな。

「クレーンゲーム×魚臣慧……いや、ロボットアーム×魚臣慧？」

スツ……と慧の目から光が消えた。

「あれ、既に魔境でネタにされ済みかな？」

「ロボットアームは機械攻め女体化魚臣受けで一時期でつかいブームが……」

「あ、それは掘り返して悪かったな」

「べ、べべ別にいいよ」

全くよくないじゃんかこのアホ。強がるにも程がある。まあ面白いから別にいいけど。

「ハ……こんどこそ」

改めてクレーンゲームに向き合う慧。でも、明らかに力の入りすぎた肩を見るとどう考えても取れる気がしない。

「……しようがないなあ」

「え？」

慧の手の上から私もレバーに手をかける。そして慧に顔を寄せて狙いを定めて……

「はいいでしょ!!」

レバーから手を離す。アームは蠅のど真ん中を捉えて……離さない。

「お、おお……」

レバーに掴まれたぬいぐるみが穴の真上へと移動する。少しずつ動かすのが鉄板のクレイニングゲームだけど、やっぱ直取りは花形!!アツい!!

そのままぬいぐるみが「ストーン」と穴に落ちて、取り出し口に転がってくる。

「よっし」

ぬいぐるみを取り出して、慧に差し出す。

「はい。あげる」

「う……うん」

慧にぬいぐるみを渡すと、私は自分のぬいぐるみをもう一度抱える。

「ほらー……こうやってぎゅーってしてみ!!やばいから!!」

「…うん」

慧が恐る恐るといったように蠍を抱く。なあ、気持ちいいだろ？気持ちいいだろ??慧の表情が一気にゆるゆるになった。

「楽羽」

「うん？」

「ありがとう！」

何故かその笑顔を直視していると気恥ずかしくなって、私はぬいぐるみに顔をうずめた。

例えばそんな喧嘩もしたりしなかったり

前回のデート、ちよつと慧の印象が違った気がする。具体的には慧が私に向けてくる視線だ。

前回私の何がいつもと違ったのか。答えは単純。私の恰好だろう。私がペンシルゴ
ンチヨイスの服を着ていたから、慧の視線がいつもと違ったのだ。

だから、ちよつと興味が湧いちゃったんだ。少しのいたずら心みたいなものだった。

デートの前に小一時間ほど早く家を出て、近所の服屋を物色して、気に入った服を
買つてそのままデートに向かった。

家にまともな外出着すらない私が、自分だけのセンスで。

それが致命的な過ちだったんだ。

「……………は？」

ふふふ…予想通り、今回も慧が会おうなり間抜けそうな顔を…

「だ、大丈夫!?!どうしたの!?!」

「え、な、何が」

「だっ!?その変な恰好…」

「へん?!?!」

!?!?!

変って言ったコイツ!!あろう事か彼女の勝負服を!!!変って!!!

慧の本気で心配するような顔が私の羞恥心を掻き立てる。

「変…なのかな?」

「変っていうか…普通の女子っぽくないというか?」

「えっ…」

私、呆然。

珍しく自分一人で勇気を出して行動して、その結果がこれですよ。

別に私のセンスを否定されたことにそこまで大きなショックを受けたという訳では

ない。正直、取り繕われでもしたほうがずっとショックだ。

だから、私がショックな点は別にある。

そう…

「自分の方がかわいいからって…自分の方が女子っぽいからって…」

「……………えっ」

怒りで肩が震える。こんなに腹が立ったのは久しぶりだ……………!!!

「いつもいつも私の女子としての自尊心抉りに来やがって!!この人でなし!!女顔魚類!!」

「……………」

「そもそもなあ!!お前の女装企画を私がどんな気分で見たとおもってる!?!自分の彼氏がどんだんかわいくなつていく様を画面越しに見せつけられるのがどれだけの屈辱だったか……………!!」

……思いだしたらさらに腹が立ってきたぞ。お前に分かるか？女子としての完全敗北を突き付けられるこの気持ち。みじめったらありやしない。

「ほかにもなあ……」

「ちよつとまてえ!!!」

うおつ。なんだ急に声を張り上げて。今声を荒げたいのはこつちなんだが？

「なんだよさつきから!!急に怒り出したと思ったらいきなりかわいいだのかわいいだの!!」

「なんだよつてそのまんまの意味だろ!?慧ちゃんが可愛いのが悪い!!」

「僕はかわいくなくてない!!」

「かわいいもん腹立つくらい!!」

「ぐぬぬぬ……」

主張は簡単。私は慧が可愛くてその上で女子っぽさまで語ってくるその男のくせに傲慢な所が気に入らない。慧は私に「かわいい」と現実を指摘されるのが気に入らない。

私達の間ではよくある喧嘩だ。

だが、毎度のことと分かってはいても、ここだけはお互いに絶対に譲れないんだ。

「僕以前に、楽羽に女子力が足りなさすぎるんじゃないの!？」

「んなッ!!女子力溢れる慧の基準で女子を語らないでくれますうー??世の女子は慧ほど女子力に恵まれてないんですうー!!」

「楽羽がクソゲーに女子力喰われただけなんじゃないのお?その程度のセンスなんて女子じゃなくても持ち合わせて当然だよなあ!!」

「ぐむむむう……」

くう……。売り言葉に買い言葉でひたすらに繰り返される罵倒の応酬。ただ、ゲームばっかしててちよーっとだけ女子力が足りてないことは自覚あるだけにムカつく!!!

「……今日はもう帰ろうか」

「……だね」

私達がこうやって喧嘩するときはずっと、一緒にいる限り不毛な言い争いを続ける。だからこそ、こういう時は一旦帰るのが毎回の流れだ。そして、とある方法での解決を図る。それは、私達の共通の趣味。

ゲームだ。

「今日は何で決着をつける?」

「楽羽も持つてるゲームの時点でクソゲーしかないんだよなあ……」

「……文句ある?」

「大ありだわ」

「……………便秘でいつか」

「おっけー」

「じゃあ1時間後、便秘で」

こうして私たちの女としての威信をかけた馴染みの喧嘩聖なる争いが、今回も始まる。

~~~~~

「……で、なんでこいつがいんの？」

「罰ゲーム要因」

「やつほ」

「ええ……」

便秘にログインした私を待ち受けていたのはモデルカツオ慧ともう一人、ここにいるはずがない女。ソイツのプレイヤーネームを見るだけでため息が漏れる。

『ペンシルコニウム』

そう、あの腐れ鉛筆戦士だ。ちなみにベンザルコニウム慧っていうのは消毒液の成分らしい。このクソゲーの世界はトップモデル様には汚いつてかはったおすぞ（被害妄想）。

「そんなつれない反応しないでよサンラクちゃん」

「おいカツオなんでコイツ呼んだ……!!」

「罰ゲーム担当に呼んでみた」

「いや意味わからん」

「カツツオくんに『負けた方を全力で可愛くしていい』って言われたから来た。面白そうだし」

「余計なことを…!!」

さっきの言い争いから一度家に帰ってるし、1時間もたっている。ある程度頭も冷えたし、腹の虫はまだ収まってないけどある程度殴り合って水に流そうと思ってた。なのに、なのにい…

「カツツオホント空気読めないね」

「ん？負けてかわいくされんのが怖いのかな？足りない女子力痛感しちゃうのかな？」

ほーん。そう捉えるんだあ。ほうほう。別に私は煽ったつもりはないんだけどね。いやね、そう捉えるならそれでもいいんだよ別に全然。まあ要するに。

「別に勝てばいいだけの話だし！余裕だし!!」

「言ったな？罰ゲーム成立だかな？」

「ふんっ、めいっばいかわいくしてやる。女装癖開拓しないように気をつけるんだな

!!

「こつちこそ。コテンパンにしてかわいさつてもんを教え込んでやる」

カツツオから私にバトル申請が飛んでくる。私は『Y e s』を選択した。

「むすう……」

「ふっ……」

「コイツのこの顔腹立つっうー!!!何?澄ました顔でもしてればかっこいいと思っ  
てんのか?」

「サンラク、今更罰ゲーム無しなんて言わせないからな?」

「……わかってらい」

「コイツ、あんな勝ち方しておいてよくもまあそんな顔をできるもんだ。」

だって、さっきの勝負の最後……………

『Rじ…………じ…………R16触手アタックウ!!!』

『あーる…………んなッ!!!…………うひゃあ!!!』

カツツオが私にトドメを刺した技は、誤魔化しこそしたものの確実に今までは『R18』を名前に冠した技で。カツツオ実の彼女の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかった。全く想定していなかった。回避が一瞬遅れてしまった私を誰が責められようか。

これが実の彼女にする仕打ちかよ。バカ。ほんとバカカツツオ。

「ふん!!彼女にエロ技使って勝ててよかったな!!」

「しかもカツツオくん、別に関き直って振り切って使うわけでもなく絶妙に照れて技名まで誤魔化す癖に結局使うとかクツソダサかったね」

「…………ツクウウ!!勝ったのに勝った気がしない!」

そりやそうだろ。お前は男として完敗だよ。今すぐにでも悔い改めろ。彼女として私が恥ずかしいわ。バカ。

「ねえねえカツツオくん?どんな気分だった??自分の彼女に『R16触手アタック』使うのどんな気分だったあ??」

「ぐぐ……………コイツ呼ぶんじやなかった……………」

「早く教えてよお彼氏さあん!!」

「そ、そりやあ照れくさかったというか…恥ずかしかったというか…」

「……………」

ちよつと黙れそれ私も恥ずかしいやつ!!エロ技使つといて何いつちよ前に照れてんだバカあ!!!

「ゴホン!……………んでペンシルコニウム、私を可愛くするつてどうするつもりなの?」

「え?うーん……………やっぱ新しい服かなあ……………」

「服ならこないだ貰ったでしょ」

「あれはサンラクちゃんか恥ずかしさを堪えてデートでギリギリ着れそうなラインを攻めたから、今度はサンラクちゃんのメンタルを一切気にせずに本気で可愛くなれる服を……………」

「ひえっ」

もう既に嫌な予感しかしないんだが…………

「ペンシルコニウム、こいつに“かわいさ”のなんたるかを教えてやってくれ」

「任せなさい。とびつきりかわいくしてあげる」

「ええ……………」



ちよつとは容赦してほしいんですが……………

私は今、慧とのデートに向かっている。服は、昨日ペンシルゴンに送られたもの。前回も思ったけどなんで私の体のサイズ把握してるんだあいつは。

通りのガラス窓に映った私の姿をじっと見てしまう。そこに居たのは、フリルやリボンのついたガーリーなファッションに身を包んだ女の子。ちよつと幼くも見えるが、このフリフリのファッションが何故か不自然には見えない。恐るべしトップモデル。

……………それにしても。

「恥ずかしい……………」

え？この格好で今から慧に会いに行くの？普通にやなんだけど？

迫り来る待ち合わせ場所。あえてすぐには行かずにちよつと離れたところから覗き込んで見る。

「慧は……いるな」

覚悟を決めろ私。すーはー。すーはー。よし。

「け……慧!!……おはよ!!」

「おはよ。ら……」

振り向いた慧が見せたのは見覚えのある反応。でも今回は私の身じろぎ一つで自分の服がひらひらと翻るのが視界に映り、余計に自分の恰好を意識させられるのが前回異常に恥ずかしい。

「そ……そんな見ないで……」

「あ、いや……その」

「なに……?」

「かわいい……すぎるよ……楽羽」

「うやあ……」

慧の顔が今まで見たこともないくらいに紅く染まっている。私の顔にも熱が籠る。だめだ、慧の顔を直視できない。ああもう！恥ずかしさで死ぬう!!!

「……かわいい」

「やめえ……」

そんなにかわいいと言われると、まともに慧の顔が見ることができなくなつた。慧も永遠さんも、今日のことはもう許さない。ずっと根に持つてやる。

顔の熱は、まだ引きそうにない。

## 例えばそんな星空を見たり見なかったり

7月7日。

多くの少年少女が星に願う日。

私は去年までそんな事なんて全く気にしてなかった。そんな事よりゲームがしたかったから。

でも、まあ、今年くらいは。

実際に願いが叶うなんて思っっちゃいない。でも、気休め程度にはなるかな。

『もう少しだけ、私に女の子らしい魅力をください』

少しでも彼に釣り合うような人間になりたいから。

~~~~~

夕方になって慧からメッセージが来た。こんな時間にどうしたんだろって思ったら、
現実側リアルで会おうという事らしい。

それにしても、本当に何でこんな時間なんだろ。いくら夏が近づいて陽が落ちる時間が早くなりつつあると言っても既に太陽は傾き始めている。ほんと、変な奴だなあ…

カポツ、カポツ、と下駄を鳴らしながら夕暮れの町を歩く。

「それにしても歩きにくいなこの格好…」

そう。今日私は普段の外行きの服ではない。私も最初は普段の服を着ただけど、何か瑠美にめっちゃ怒られて着替えさせられた。

………浴衣に。

なんで瑠美は浴衣の着付けなんてできるの…？なんて疑問は置いておいて、紺色の浴衣を身にまとい、お気にのヘアピンも外して簪を髪に刺した私は慧と並んで目的の場所に向かって歩いてるわけなんだが…

「……それになんかはずい」

別に近所でお祭があるわけでもないのに浴衣なんて来て外を出歩いてるのなんて私たちくらいな物だろう。すれ違う人の視線が刺さる。

「それは楽羽がすごい浴衣が似合ってるからだと思うけど？」

「…そういうこと言うな」

私の隣でそうのたまう慧も浴衣に身を包んでいる。あ、女装じゃなくて普通に男物ね。そしてこれが絶妙に似合っていない……わけでもないのがちよつと腹立つ。見てくれはいいからなコイツ。

「……慧も似合ってるんじゃない？」

「あ……ありがと……」

自分はお構いなしにこういう事言うくせに、言われた途端にいつちよ前に照れてるんじゃないよ。こつちが恥ずいわ。

陽が完全に沈みきったところ、たどり着いたのは小さな公園。遊具なんてない、ただ芝生が広がっているだけのような公園。到着するなり慧はテキパキとレジャーシートを広げてそのまま寝そべった。

「……何してるの？早くおいでよ」

「おいでって……これなに？」

「いいから、こつち」

招かれるままにシートの上に腰を下ろす。

「上、見てみ？」

「ん？……うああ……」

満天の星空。

天の川を中心に、幾千万の星々が夜空に煌いていた。確かに理想の星空を追い求めた電脳世界の星空より輝きが劣ることもあるかもしれないけど、そんな作り物よりずっと素敵なものだと、直感的に感じる。

「…すごいね」

「でしょ」

一つ言葉を交わせばすぐに静寂が下りる。この公園には私たち以外誰もいない。ただ、私と、慧と、星空だけの空間。なぜか、それだけの空間がたまらなく心地よくて、ついつい没頭して星を見入っちゃう。

「寝そべんないの？」

「うん」

「気持ちいいのに」

「髪が崩れるから。瑠美に殺される」

「辛くない？」

「だいじよぶ」

「よりかかる？」

「ん」

いつの間にか体を起こしてた慧に体重を預けて、星を見続ける。

絶景なんてゲームの世界で腐るほど見てきた。それでも子の星空にここまで心を奪われるのはなんでなんだろう？

電脳世界でのいつでも見れる星空とは違って今しか見れないこの景色を少しでも目に焼き付けようと必死になる。夜空を真っ二つに割る天の川を、その存在感を主張する夏の大三角形を、視界に映るすべての星々を、そして、この体を包む心地よいぬくもりを……

……ぬくもり？

「ひえあつ?!?!」

「どうしたの?」

「や……にやんでもない……」

あれ、今私、慧にもたれかかっている?!? 何でこうなったんだっけ?!? 星に夢中になって何も覚えてないぞ?!?!

だって、あれ?!?! 私ずっと星を見てて……なんで?!?!?!

「……楽羽?」

「ダ…ダイジヨブ」

いつもより私の名前を呼ぶ声が近い。声だけじゃない。慧の体もいつもより近く感じる。今日の慧は浴衣姿でなおさらだ。慧に背中を預けて、この距離で慧の声を聴いていると本当に慧に包まれているみたいで…

……ナニコレスゴイ!?

「ねえ、楽羽」

「…なに?」

慧の一言で我に返る。トリップ寸前の理性を何とか意地で捕まえる。だめ!この距離でそんなドキドキしたら慧にばれる!!

落ち着け…私…ふう…ふう…

「楽羽?」

「……いいよ。ダイジヨブ」

……頼むからそのきよとん顔をやめてくれ。

「??まいつか……あのさ、楽羽は学校でかつこいい男子とかいないの?」

「…は?」

……急に何言ってるんだコイツ。意味不明すぎてさつきまでのテンパリも一気に落ち着いたぞ。

「楽羽はさ、華やかな現役高校生なわけで、ちよつと見渡せばそれこそ男なんていくらでも選び放題なわけだし、それでも今は俺といてくれる。とてもうれしんだけどさ、どうしても不安になるんだよ。楽羽は、本当に俺と付き合っていていいのかなって……」
深刻な顔をするから何の話かと聞いてみればなんだ、どこか覚えのある悩みだ。

「……………別に私はイケメンとつきあうことに価値を感じないし。慧といるのは楽しいから、別にいい」

もちろん慧からすでに聞いた悩みではない。

……これは、私が今まで考えていたことだ。

永遠さん、恵ちゃん、シルヴィ。メディア露出してるような魅力的な人に囲まれている慧がただの一般人の私なんかを相手にしてていいのか。ずっと思ってたこと。

「慧こそ、私なんかでいいの?」

「え、当たり前じゃん」

「私よりかわいい人は慧の周りにいくらでもいるよ?」

「別にそんなのに興味はないよ。俺は楽羽がいい」

「……………ははっ」

なんだ、二人とも同じようなことで悩んでたのかあほらし。私は慧に変なかつこよきなんて求めてなかった。それで、慧も私に妙な女の子らしきなんて求めていなかったというなら、結局私の考えてたことは杞憂だったってことか。

なんかすつきりした。というか、さっぱりした。慧と星を見るこの空間がちよつと心地よくなった。

「…楽羽？」

「ん？」

「星がきれいだね」

「……………月じゃないの？」

「月が良かった？」

「別に」

「そか」

もし慧に月がきれいだと言われたら、私はなんて返すつもりだったんだろ。分かん

いや。でも、今日は七夕なんだから、月じゃなくて星に、織姫様と彦星様に、願いを込めてみるのも粋な物だろう。

お星さま、お願い変えるね。

女の子らしい魅力もいらさないわけじゃないんだけど、まあ貫わなくてもいいや。

だから、もう少しだけ。

もう少しだけ、この時間を終わらせないでください。

このただ慧と星を見るだけの時間を、もう少しだけ。

例えそんな聖夜を過ごしたり過ごさなかったり

クリスマス。

人によつてはこの単語を聞くだけで浮かれ始め、実際に当日が近づこうものなら仕事やが勉強が一切手につかなくなつてしまふという、魔性のイベント。

当日はみんなで集まつてパーティーをしてみたり、家族で美味しいものを食べに行つてみたり、楽しみ方は人それぞれだが、多くの人にとつてのクリスマスの楽しみ方、その醍醐味の一つと言えは……

プレゼントだ。

一応私も彼氏持ちの身。当日慧が仕事あるからつて何もしないのはなんだか味気ないかな……なんて思いつつ、一応はプレゼントのサーチを試みたのだが……

……いやわっかんねえよ。

授業の合間に携帯でどんなものが彼氏受けがいいか調べてみたのだが、どれもこれも当てにならない。

ネット上の記事が信用できない？いや、そんなことはないだろう。むしろ問題はプレゼント^慧を贈られる側^方にある。

調べて出てきたのはマフラーや腕時計、手袋といったファッション品が主だったわけだが……慧はもう持つてるんだよね。めっちゃいいブランドのヤツ。

考えてみればそれはそうだ。慧とて顔を出して商売する職業の端くれ。しかも格ゲーにおいてはチームを背負って立つ顔のような存在だ。当然面目の立つような装いは持つてるし、揃えるだけの稼ぎがある。そこに私の小遣いで買えるような安物を送り付けたって使うわけがない。

そもそも私の小遣いも限られている。そんな高級品なんて送れるわけないだろ。

……だからこそ。

だからこそ、この授業でやる事を聞いた私は電流がバチイ……!! って走るような思いだった。

……そうだよ！これだつてプレゼントの鉄板!!!

「手作りの……お菓子っ……!!」

「あれ？楽羽ちゃん、なんかやる気入ってる？」

「家庭科の授業で作れるようなお菓子なんて限られてるでしょうに」
「ていうか珍しい。この手の授業で燃える楽羽」

ただの家庭科の授業。学生にとっては半分お遊び認識の調理実習。

だけど、うちのクラスでは作った料理はその場で食べるか持つて帰るかが選べるんだ。実際、今日はプレゼント用のお菓子を作ろうとしている子も珍しくない。

「そういえば楽羽の彼氏、年上の大人のなんだっけ？」

「へ？うん。そだけど」

「いいよね〜年上彼氏。羨ましいわ」

「いや、そんないいもんでもないよ？」

ちなみに、ウチのクラスの女子で彼氏持ちは半分ほど。学外で彼氏作ってる娘は意外と少ない。そう考えると私はそこそこなレアケース。こういう話が振られることも少

なくはない。

「楽羽ちゃんはいつもそういうけど、独り身からしたら羨ましいことこの上ないからね？」

「本当にそう思ってるんだけどなあ」

「その割には今日のお菓子作りにも本気だよね」

「それはまあ……ね？」

だって今日で済ませればあと悩まなくて楽じゃん。なんて言うところの彼氏至上主義者たちが怒りだしそうなので黙っておく。あと、せつかくならいもの渡したっていうのも嘘じゃないしね。

そんな雑談をしながらお菓子作りの準備を進めていると、ふいに同じ班の子たちの私を見る目が……

「ん？どうしたの？」

「ら……楽羽ちゃん？それなに？」

「ん？チョコに入れる奴だけど……」

よし、なんかわからんけど一気に作ってしまえ!!

「あー!!ストップストップ!!ウイスキーボンボンってチョコに触接ウイスキー入れてるわけじゃないから!!そのウイスキー仕舞って!!」
「…………へ?」

授業後に職員室に呼び出されました。

~~~~~

さんさんではあったけれど、何とか形にはなった手作りのお菓子。さて、これを何とかして慧に渡さなきゃいけないわけだが……

「うう……やっぱり手作り、重い?」

当日になって急にこみ上げてくる不安。

お菓子という発想になった時点で既製品を買う選択肢はあったはずなのに、全くお思い至らなかつた自分の視野の狭さが悲しくなる。そりゃあ乙女心としては手づくりの方が作ってて楽しいし受け取ってもらえたらうれしいよ?でももらう側のことを考え

たら間違いなく美味しいのは既製品だし……。

とはいってももうデパートのお菓子売り場は完売御礼の札を掲げていていまから買  
いに行つたら間違いなく待ち合わせに遅れてしまう。もう腹をくくるしかないのだが  
……

「う~~~~!!!!」

手元には小さな袋を大きなラッピングで誤魔化したお菓子袋。派手な見た目とは裏  
腹に思いのほか地味に落ち着いた中身のことを考えるとどうしても後悔が……  
やっぱり今からでも新しいのを買いなおして……!!

「お待たせ、楽羽。寒かったでしょ」

お前はいつもそうタイミングの悪い時に!!……まあ待ち合わせ時間通りなんだけ  
れども。

「慧も寒い中仕事お疲れ」

「うん。ありがと」

駅前広場では今にも雪の降り始めそうなほどの寒さがあたり一帯を包んでいる。本  
当に降ってくれば雰囲気も良くなるのだが、そんな偶然が起こらないから現実つてや

つは。

「とりあえず、俺んちいこうか。寒いし」

「そだね」

つい、最初に渡してしまおうと思っていたお菓子の小包をサツと体の後ろに隠してしまった。

まあ、こんなのいつでも渡せるでしょ。

そう思いながら機会を伺う。

伺いながら歩いて……

歩いて……

……

結局、渡せないまま慧の家に着いてしまった。

「あくあつたかあく。ひよつとして慧、家の中暖房かけっぱなしだった？暖かすぎない？」

「いや、さつき遠隔でつけておいた。流石につけっぱなしは電気代が嵩む」

「ほえー。何そのハイテク」

結局、菓子包みは道中で鞆にしまった。

ーやっぱりおいしくないだろうから。

ー見た目もきれいに作れたとは言い難い気がしてきた。

ーもしかしたら道中で崩れちゃったかもしれない。

……………作った直後はあんなに自信満々だったのになあ。

今となつてはこの小包を渡さずに家に持って帰るための大義名分を探し始めていた。

「じゃあ、リビングの方で待つて。ご飯の準備しちゃうわ。上着は適当にかけておい  
て」

「りょうかーい」

キッチンに引っ込んでいった慧に促されたまま私はリビングの椅子に腰を下ろす。

「……慧、今日の料理は全部手作りなんだっけ？」

「うん。そだよ」

慧は私よりが料理できる。彼女としてはやはり複雑だ。

「けー。りょーりおしえてー」

「別にいいけど……急にどうしたの？」

「なんか壮絶に悔しいから」

「それ、俺に教わることは悔しくないの？」

「負けっぱの方が悔しい」

「そか。じゃあ今度しつかり教えるわ」

ちらと目をやると、慧は鍋でスペアリブを煮込んでいた。そのそばにはコーラの空きペットボトルが一本。スペアリブをコーラで煮込むと美味しくなるってあれ本当だったんだ。

キッチンからはほのかに甘い香りが漂ってきて、だんだんお腹がすいてくる。慧が料理できることは知っているけど、あまり手料理を食べることもないから実際慧の料理の味は想像できない。

だからこそ、すごい楽しみになっている自分がある。

もし自分が料理出来たら、慧にこんな気分を味わわせることができるのだろうか。

「……やっぱいいや。自分で練習する」

「そう？」

「うん」

「ちなみにどういう心変わり？」

「上達前のまずい料理を慧に食べさせたくない」

「この部屋を見てもわかる通り慧の生活はかなりの高水準。舌もそこそこ肥えてるはず。だから、やっぱり……」

「……どんな料理でも楽羽が作ったなら食べたいんだけどな、僕は」

そう言ってくれるのは彼女冥利に尽きるが、やはり食べさせる側としては複雑なわけ  
で。

「上手くなったら、ね」

「そもそも料理なんて相当トンチンカンな材料を使わない限りそう不味くはならないから安心しなよ。大丈夫だって」

「それ料理できる人のセリフ……」

「じゃあ、試しに食べさせてよ」

「いやいや、今作れってか」

「ううん。持ってるでしょ」

「……へ？」

何言ってるんだコイツ……

ぱっと慧の顔を覗いてみれば至って普通の表情でからかっているわけではなさそう。

そして、慧の視線がふつと逸れる。

それを追って……そして、気づいた。

「……ッ?!?!?」

その視線の先には私のカバン。鞆の中には……

仕舞ったはずのお菓子の袋のその頭が、かすかに顔を出していた。



「あれ、楽羽が作ってくれたんでしょ？」

「そ、そうだけど……」

「ねえ、楽羽」

「ちよ、ちよつと待って!!」

ん？と首をかしげる慧に抗議の視線を送る。だつてそうだ。百歩譲つてラツピングであれがクリスマスマスプレゼントだつて分かったとしても、あれの中身が食べ物だなんて一言も言つてないし、中身について慧が知ってるはずが……

「……なんであれが食べ物つて分かったの？しかも私が作つたことまで」

「だつて楽羽が渡し渋るのは基本自分で作つたものだし。何か買ったものなら逆に自信満々で渡すでしょ？」

「まあ、確かに」

「あとは、楽羽が作ってくれたらうれしいなあつて物を、何となく」

「なんとなく!!」

一番知りたかつたところを何となくでぼかされてしまった。ていうか今、作ってくれたらうれしつて……

「ねえ、楽羽、それ、俺食べてもいい？」

不思議な気分だった。

さつきまであんなにも渡したくなかったのに。慧が背中を少し押ししてくれただけで、今は慧にどうしても食べて欲しいって思えてしまっている。

さつきまで同様、不安は全然ある。この女子力の塊みたいな男に女子力ミジンコの私の手作りのお菓子を上げようというのだ。だけど、それでも、悪いようにはならない。しないでくれる。そんな根拠のない自信が沸々と湧いてくる。

手は、自然と袋に伸びた。

「はい、慧。……メリークリスマス」

「ありがとうっ!!」

受け取るなり目を輝かせる慧。

そんなに喜ばなくてもいいのに……期待しないで……

そんな私の思いは届かなかったのか、慧は嬉々としてラッピングを開けていく。中からは中途半端に大きい不格好なチョコツキーが一つ出てきた。

「いただきます」

「……召し上がれ」

……カリッ。

一瞬の無音の中にクツキーを齧る音が響いた。

噛みしめるように味わう慧。ほんの一瞬、その一瞬がすごく長く感じる。冷や汗が  
つうーつと額を流れた。

そして、再び慧の口が開かれる。

「美味しい……!!」

「ツ?!?」

どうしても聞きたかった言葉が耳に届いて、一瞬で頭が沸き上がる。

「ほんと!?!」

「ほんとだよ!」

「ほんとにほんと?!?!」

「ほんとだってば!」

思わず慧に詰め寄るようにしてその『美味しい』を噛みしめる。頭の中で反芻するた

びに不安で冷えてた頭が溶け出していつて、張り詰めていた全身が解れていった。

「…んむぐつ!?!」

安心に浸っていたその時、急に何かで口が塞がれた。それは、口元でカリツと音を立てて口の中に転がり込んできて、私は思わずそれを噛み潰した。

「ね?甘くて美味しい!」

よく見れば、さつき一口齧っただけのはずのケイの手の中のクッキーがさらに小さくなっている、きつとその小さくなった部分は今私の口の中に……

私が啞然としてるさなかに慧は残りを口の中に放り込んだ。

……………

つてそれ間接キス……!!!

「でしよっ!」

そう聞いて私を覗き込んできた慧の口元に視線が寄せられる。

尋ねられても、間接キスに気を取られて味なんてもうわからなかった。

「……甘い」

「でしよ?」

味はよくわからなかった。

でも、その口の中が、頭の中全部が、ひたすらに甘く痺れた。